

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 711 号] 2021 年 9 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.711

September 2021

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

南相馬とバッハ合唱団を繋いだ、反原発の詩人

## 若松丈太郎氏、逝く

東京バッハ合唱団の皆様

若松 蓉子

謹啓 若松丈太郎の妻で若松蓉子と申します。

今年も、今月も、若松丈太郎宛の貴会「月報」をお送り頂いておりますが、夫は 2021 年 4 月 21 日に天に召されました。お知らせが遅れまして大変申し訳ございませんでした。

貴会東京バッハ合唱団様との交流を彼はとても大事にしておりましたが、途絶えてしまうことに私としても残念に思います。長い間のご交誼ありがとうございました。

少々長くなりますが病状を申せば、昨晚秋の頃から何となく体調が思わしくなさそうでしたが、いつもの様に読書・詩作・調べ物・クラシックを聞く・クイズをする等々の生活でした。年明けの頃から食欲が急に失せ、外出も好まなくなりましたが、どこと云って痛い苦しいとは言いません。結局大きな病院に行ったのは 3 月初めで、検査のくりかえし、4 月 4 日に最終の医師との話し合いをしました。

病名は「播種性(ハンシュセイ)腹膜炎」小さい粒々の癌細胞が腹の中に無数にあり、除去できない状態で手遅れということです。この癌は痛みもなく殆んど気づかないのだそうです。私たち夫婦と主治医ととことん話し合い、私たちは

これ以上の手術・検査・延命措置は不要

コロナの世の中故、入院はしない(家族に会いた  
いから)

自宅療養、妻介護で最期を迎える

いよいよの時のみ、入院させて欲しい

こんな判断を認めていただきました。それから何日か本当にいろんな話をして過ごし、急変したのは死の 3 日前、全く食べられなくなり、顔をしかめ苦しそうになりました。その日、30 分程用事を足して戻って声をかけましたが反応がなく、でも静かな顔色も良く穏やかな顔でした。脈がないので救急車で病院へ、到着して 30 分位、静かに大好きな天空へ昇りました。

丈太郎は自由葬で(戒名不用、無宗教色、友人葬の様に)送って欲しいとの遺言でしたので、詩人仲間・いくつかの市民団体の友人・家族と相談し、密葬後数日経て「お別れ会」で送りました。その時、東京カテ

### 団友・若松丈太郎さんをお悼みします

2015 年夏、東京バッハ合唱団の第 112 回定期演奏会は、福島県南相馬市で開催されました(8 月 22 日、南相馬市民文化会館)。

その 4 年半前の 3 月 11 日、東日本大震災の衝撃は、東京でも度肝を抜かれる凄まじさでした。時間がたって現地の惨状が伝えられると、団員もみんな、われわれにできることはないか、と話し合うようになりました。日本国中が同じ思いだったことでしょう。おりしも、創立 50 周年記念の 4 大合唱曲連続公演(2011-2014)に全力を注いでいた時期で、臨時企画を挟み込む余地はありませんでしたが、いつか現地について励ましの演奏を届けたい、という夢が膨らんでいました。

そのわれわれの夢と、合唱好きの南相馬の方々気持ちとを繋いでくださったのが若松丈太郎さんでした。現地の合唱団体や自治体の関係者を集めて、受け入れ体制を整えるきっかけを作ってくださいました。開催が決まり、われわれも南相馬公演への参加団員募集をひろく呼び掛けました。このときに入団なさってコンサートツアーのバスに同乗された方々のうち、今も 6、7 人の団員が歌いつづけていらっしゃいます。若松さんの願いを継ぐ方々です。(大村恵美子・主宰者)

ドラム聖マリア大聖堂のオルガにストの青田絹江さんが電子ピアノではありましたが、式中ずっと、また献奏としてバッハの曲を弾いてくれました。絹江さんは私の中学の教え子で(南相馬出身。コロナの状態なので実家に戻っていました)私たち夫婦とも親しかったです。コロナがひどいので参列の方は多くはありませんがとても良い式でした。丈太郎は天体に興味のある人で天文台に勤めたいと思った人ですから、私は「宇宙塵(ウチュウジン)」になって夜空の片隅から私たちを見ているのだな、と思っています。

乱筆な字で走り書きのようになりましたが、東京バッハ合唱団の皆様へのお知らせとしてお許しください。どうぞコロナ禍の折、猛暑のこの夏を無事にお暮らし下さる様願って若松丈太郎の気持ちの代弁をいたしました。

本当にありがとうございました(2021 年 8 月 5 日)。

### 月報 2021 年 9 月号 CONTENTS

- ・故 若松丈太郎氏の寄稿再掲…p. 2
- ・招待演奏会ご案内
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [7] (大野博人) …p. 4

【ご寄稿再掲】

(東京バッハ合唱団「月報」2014年12月 [630号])

来年の夏を、いまから心待ちしています

若松 丈太郎 (団友、詩人)

東京バッハ合唱団の第112回定期演奏会は、「そうま地方合唱を楽しむ会合唱団」との共同企画<3.11被災地訪問演奏>として、来年2015年8月22日に、私が住む福島県南相馬市の市民文化会館「ゆめはっと」でおこなわれることに決まりました。

2011年の秋に、南相馬市の九条の会4団体が共同して、市内の早期の徹底除染を求める「除染で子どもたちが安心して暮らせる南相馬市に」の署名活動をおこなったところ、全国から1万3千筆を超える賛同の署名をいただくことができ、東京電力本社と首相官邸に提出しました。このとき、東京バッハ合唱団のみなさんの署名が代表の大村恵美子さんから届けられたことが、うれしい出会いの始まりになりました。さらに、翌年の1月に仙台市にいらっしゃっていた大村さんと、坂本幸生さんのご案内によってお会いし、お預かりしたカンパを「はらまち九条の会」平田慶肇会長へお届けしたということがありました。

このような出会いをとおして、大村さんが望んでいらっしゃる被災地の人びとを励ます音楽を届けたいという願いと、被災者との連帯によって現実に立ち向かう力をともに得ることができるのではないかとの思いの強さと深さを知りました。そんないきさつがあって、市民文化会館前館長の石田賢二さんを介して、東京バッハ合唱団と藤澤正孝さんを代表とする「ゆめは

っと合唱団」との話し合いと具体化への打ち合わせが始められたのです。

合唱が盛んな福島県のなかでも南相馬市は他にひけをとらない存在でしたが、3.11以後は市外に避難した団員も多く、合唱団のいくつかは思うような活動ができないようです。そこで、ゆめはっと合唱団からの呼びかけに応じた市内7団体の有志のみなさんが「そうま地方合唱を楽しむ会合唱団」を結成して共演し、東京バッハ合唱団の第112回定期演奏会に協力することになりました。南相馬市内の合唱団にとっても、活発な活動を取りもどす好機を得たのではないのでしょうか。

ほどなく、核災(核使用を原因とする災害)が発生して満4年になります。その間、「被害者づらをするな」とか「3年もすれば、だれも口にしなくなるだろう」などのことばを耳にしました。しかし、避難生活をしていると否とにかかわらず、私たちはこれまでの生きかたを変える、というよりは、捨てることを余儀なくされました。はじめからやりなおさねばならない現実、新しく生きなおさねばならない現実のなかにいます。ながい将来を見据えて、価値観の転換を図らねばなりません。そのためにはあったことを忘れ去ったり、なかったことにすることはできません。復旧とか復興とかいわれる次元の問題ではないのです。このような状況のなかでバッハの音楽を聴くこと、そして、発せられるメッセージを受けとめることは、私たちが新しく生きなおすための力となるものであるはずだと、私は信じています。

来年の夏を、いまから心待ちしています。

若松丈太郎さん

1935年、岩手県奥州市生まれ。1962年から南相馬市に定住。高校の国語教師を34年間勤めた。1971年に福島原発が稼働してから、原発の危険性と原発に取り込まれていく地元住民の苦悩を、評論と詩で警告・告発し続けてきた。1994年にはチェルノブイリを訪ね、30km圏内の町や村も訪ねた。帰国後、福島原発から25km地点である南相馬市が原発事故後どうなるかを予測した「神隠しされた街」を含む長編詩「連禱 かなしみの土地」を書き上げる。現在も南相馬市に在住し、地元の現状とそこで暮らしている心情を書き続けている。『福島核災棄民 ― 町がメルトダウンしてしまった』コールサック社刊の帯より)。2021年4月21日逝去。

東京オリンピックの墳末

大村 恵美子 (主宰者)

この夏に東京でオリンピックをするかしないかで、世論は2分されていましたが、結局、内閣の主張がまかり通ってGoとなり、案の定、コロナ感染者は大きくふえました。

私人間として最も重視したい方針は、生身の人間を、自他ともに傷つけず、殺さないことです。口論や討論などの、意識上のやりとりでも死んだり殺された



■写真は若松丈太郎氏。朝日新聞2012年11月19日夕刊「ニッポン人脈記」で紹介された。(月報2014年12月号 [630号]より再掲)



りすることはありますが、それは対処の仕方であらうともあります。また、自分や他人に対する敵意や競争心がなくても、結果として死を招くこともあります。

最近のニュースで私が大きく悲しんだのは、幼稚園のバス内に、眠っていた児童が忘れられて死んでしまったというものでした。誰にも悪意はなく、親御さんのショックは計り知れないほどですが、大切な園児をおき忘れてしまった責任者のおとなも、自分の将来が考えられない位の苦痛にちがいません。何かに対して怒るよりも、私は悲しい一方です。

人間は誰でも、正しく生きようとして、最大の努力をしながら生活しても、全く思いがけないことで悲劇を呼びこんでしまうことがあるのです。自分の場合に悔やむだけでなく、他人の出来ごとであっても、同じように悲しいのです。自分に対しても、多様な失敗に、心を落ち込ませず、また他人の不祥事にも、直面してしまった当人のやるせなさを責めたりしないで、何とか立ち直ってほしいと、祈りたくなります。

今年の夏は、集まることを禁じられつつ、他方では他人の関係のいざごのニュースも心に刺さったような気がします。どんな時でも、自分の安全と同様に、他人とのオープン・マインドの交流につくしてゆきたいものと思います。

## COLLEGIUM ARMONIA SUPERIORE JAPAN (ARS) がネット配信

いつも協演して下さる器楽アンサンブルのARSが、事前に収録した画像を、9月26日からネット上に公開します(下掲)。ご鑑賞をお勧めします。

- W.A.Mozart K.16 Symphony No.1
- W.A.Mozart K.297b Sinfonia Concertante
- W.A.Mozart K.250 Serenade No.7 "Haffner"

公開日の前日、25日は、その有志が右段にご案内のわれわれの「招待演奏会」のオーケストラを務めてくださるなど、ご多忙です。

ARSと略称で呼ばせていただいています、COLLEGIUM ARMONIA SUPERIORE JAPAN (コレギウム・アルモニア・スペリオーレ・ジャパン)が正式名称【赤表記は編集部】。ともども、応援していただければ幸いです。



### — 後援会員の皆様を 限定ご招待 —

## 招待演奏会

① 9月25日(土) ② 10月2日(土)  
いずれも、開演 15 時 30 分 (開場 15 時)

会場：日本キリスト教団・荻窪教会

※) 感染対策上、各日、後援会員のみ 12 名限定。

※) ①②のいずれかをお選びいただき、お申し込みください(宛先：本紙タイトル囲み。できればメールで)。各日とも、申込みの先着順に 12 名ずつをご招待いたします。結果は事務局より通知。詳細はお問い合わせを。  
※) ただし、都内の緊急事態宣言が 9 月 12 日以降にも延長の場合は、会場(荻窪教会)の使用が不可となる可能性もありますので、その際は順延とします。あらかじめご承知おきください。

- カンタータ第 113 番《イエス 高き宝》
- カンタータ第 93 番《ただ主に依り頼み》
- カンタータ第 78 番《イエス わが心を》
- カンタータ第 184 番《待ち望みたる 喜びの光》
- 珈琲カンタータ《お喋りはやめて お静かに》  
(各曲、合唱部分を中心に抜粋)

演奏：COLLEGIUM ARMONIA SUPERIORE JAPAN (略称ARS)  
有志(器楽アンサンブル)、田尻明葉(オルガン)、東京バツハ合唱団(合唱/独唱/斉唱)、大村恵美子(指揮/訳詞)

### 東京バツハ合唱団 後援会員の皆様へ

- 後援会の皆様には、毎年、定期演奏会へのご招待をお約束していながら、この予期せぬコロナ禍のために、2年間、果たせずしております。それにも拘わらず、ご支援をご継続いただき、感謝に堪えません。
- このコンサートは、発表機会を失ったカンタータたち(上記 5 曲)と、練習成果の披露の場を奪われたコーラスと器楽アンサンブルのための、「まとめ」の演奏会です。
- われわれは、好きな音楽のためとはいえ、コロナ禍に怯えながら、緊急事態宣言の合間を縫っては練習をかさねて予定の当日を待ちました。それが先延ばしになり、順延の予定も裏切られ……。すべての場所で、ソリスト方をはじめ、多くの関係者の方々が開催に向けての準備をされました。各地のファンの皆様も、そのつど開演を楽しみにしてくださいました。
- 時期が時期だけに、当初は、無観客で、内輪の仲間のみによる、曲目とのお別れのコンサートとするつもりだったのですが(来年は 60 周年！いつまでも引きずるわけには行きませんので)、せめて一人でも二人でも、見届けてくださるお客さまをお招きできないか、と、会場スペース・換気性能・出演人数等の計算から、観客は、各回 12 名まで、という解答を得ました。
- この 1 年半、皆様には月報紙上をとおし、われわれの苦境と工夫とを、つぶさにお伝えしてまいりました。環境悪化の折りながら、お見届けいただければ幸いです。

### <お知らせ>

連載「バツハ・カンタータの場景」は、スペースの都合で、今月は休載させていただきます。次回からは、60 周年記念公演(2022/5/14、杉並公会堂)の演目(BWV 21、1、147)を順次取りあげて、ご紹介させていただく予定です。

◆月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。  
[http://bachchor-tokyo.jp/monthly\\_newsletter/index.htm](http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm)

## 締め切りのない日々

安曇野閑人 大野 博人

退職でいちばん楽しみにしていたのは「締め切り」から解放されることだった。

新聞記者だった約40年間、なんの締め切りも抱えていないという日はなかった。

記者にとって締め切りは絶対。綿密に取材し、わかりやすい文章にまとめて、締め切りまでに出稿できなければアウト。いつも重圧だった。それがなくなる！

ネット時代の今とちがい、私が現場にいたころの新聞の締め切りの基本は1日にふたつ。夕刊向けと朝刊向け。日々のニュースは、夕刊なら遅くとも正午には原稿を仕上げる必要があった。朝刊だと午前1時くらいがギリギリ。それとは別に連載記事やコラムの締め切りも数日単位で迫ってくる。

駆け出し記者をしていたとき、夕刊の締め切り30分くらい前に郵便局強盗が起きた。駆けつけた現場はまだ混乱していて、何がなんだかわからない。記者たちは、あわただしく動き回る鑑識課員に食い下がったり、回りにたむろする人の中から目撃者を探したりして情報を集める。締め切りまであと10分という段階で社に電話をかけ、原稿を読み上げて書き取ってもらう。机にすわって書く時間などないので集めた情報をもとにわかったことだけで組み立てた頭の中の原稿。それを声にして伝える。

新聞記者たちは、これを「勸進帳」と呼んでいた。弁慶が追っ手から義経を守るために機転を利かせて演じた歌舞伎の有名な場面になぞらえた言い方だ。その場で与えられたテーマからそれらしい曲に仕上げる即興演奏みたいなものだ。

とはいっても、駆け出し記者には必要最小限の情報を伝えるのが精一杯。即興演奏から名曲が生まれたバッハの《音楽の捧げもの》のような具合にはいかない。

スマホなんてない時代に外国で戦争や大災害の現場に出たときは、締め切りを守ることで至難のわざだった。

海外での現場取材で、先輩記者にまずたたき込まれたのは「通信手段の確保」である。

「通信手段がなく締め切りまでに原稿を送れない記者は記者ではない。難民だ」

実際、現場では確実に東京への連絡手段をさがすことが最優先だった。大地震に襲われた町に入ると国際回線が機能している電話はどこにあるか、紛争中の国に入ると使えるテレックスはどこに何台あるか、取材より先に確認した。

日本に戻り定期コラムなどを担当するようになって、締め切りはいつも心にのしかかっていた。

書くのは時事コラムだ。ということは、どんなニュ

ースを題材にしても刻々と変わる情勢を受けて臨機応変に内容を変えなければならない。大きな出来事が起きれば、ほとんどできていた原稿をあきらめて別の原稿を書くしかない。それが締め切り直前だと、胃がキリキリ。今回ばかりは書けない、紙面に穴をあけてしまう、と血の気が引くような思いをしたことも。

ところがほんとうに不思議なことに、締め切り時間にはいつも原稿ができていた。しかも、ふだんよりうまく書けていることもあった。

「締め切り」は人にむりやり大量のアドレナリンを放出させる仕組みなのだ。私は元来怠け者である。締め切りがなければほとんどなにもしないまま暮らしてきたと思う。そんな人間にも仕事をさせるのだから、すごい。つくづくこれは人類の偉大な発明の一つだと思う。

さて、その締め切りから逃れて退屈と無為を満喫するはずが、実は最近、またそれに追われている。ゆっくりと流れる自然の時間と歩調を合わせるはずの畑いじりにも締め切りがあったのだ。しかもけっこう厳格な。

種まきの締め切り、苗を植える締め切り、肥料をやる締め切り……。近所に住む野菜作りのベテランを師匠にしているのだけれど、作業の指示が緻密。

「追肥は遅くとも今週中に」「トウモロコシの種まきはこれ以上遅れないように」「次の作物の畝作りはもう始めないと」

そのときどきの天候を見ながら、作業の手順を臨機応変に変えなければならないこともある。コラムの執筆みたい。

ここ数日、畑仕事をサボっていたらキュウリが何本も信じられないほど巨大になっていた。八百屋で売られているものの3、4倍はありそう。でも大味でおいしくない。収穫にも締め切りがあるのだ。

結局、締め切りから逃れるというのは、見果てぬ夢かもしれない。

というわけで、このコラムもなんとか締め切り間に合わせました。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)

■収穫の締め切りを過ぎて、大きくなりすぎたキュウリ  
(写真も筆者)

